



TITLE:

京大広報 No. 712

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 712. 京大広報 2015, 712: 4453-4472

ISSUE DATE:

2015-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202944>

RIGHT:



京大広報

No. 712

2015.6



赤崎 勇 博士に名誉博士の称号を授与 —関連記事 本文4459ページ—

目次

一人ひとりが全学的視野をもって 財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長 佐藤 直樹……………4454	〈寸言〉 「好き」に向かって走れ！ 今井 雅子……………4461
〈大学の動き〉 副学長事務代理が発令される……………4456 ペドロ・パソス・コエーリョ ポルトガル首相 が本学を訪問……………4456 山極壽一 総長が第4回日独6大学学長会議に 参加……………4456 マハ・チャクリ・シリントーン タイ王国王女 が本学を訪問……………4457 クロックタワーコンサートを開催……………4457 京都大学春秋講義(平成27年度春季講義)を開催 ……………4458 京都大学グリークラブが創設50周年記念演奏会 および祝賀会を開催……………4458 赤崎 勇 博士に名誉博士の称号を授与……………4459	〈随想〉 京都が刻み続ける時間の『ものさし』 名誉教授 西本 清一……………4462
〈部局の動き〉 東一条館除幕式を挙……………4460	〈洛書〉 国立公文書館新館建設によせて 奈良岡 聰智……………4463
	〈栄誉〉 吉田潤一 工学研究科教授、守倉正博 情報学研 究科教授が紫綬褒章を受章……………4464
	〈話題〉 「竹の環(わ)プロジェクト」を開催……………4465
	〈資料〉 平成27年度 入学試験諸統計……………4466 平成27年度 総長裁量経費による採択事項……………4470
	〈計報〉……………4472

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

巻頭言

一人ひとりが全学的視野をもって

財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長 佐藤 直樹

昨年10月に上記の理事・副学長を拝命して以来、本学が様々な難局に立ち向かうべき時期にあるとの実感を強めていますが、その都度、重責を負ったことの自覚を新たにしています。理学畑の大学院を修了後、三つの研究機関・大学を経て宇治地区にある化学研究所に赴任し、電子構造解析を軸とした有機半導体研究に携わってきた身には、上記担当事項の総てが極めて“新鮮”です。9月までの二年半に部局内で若干それらに関わったとはいえ、その程度の経験では現在の任務・職責には用をなしません。本学のため微力を尽くす気持ちではいますが、本学在籍の、そして本学に様々な形で関わってくださる皆様のご理解とご協力が何より不可欠ですので、最初にそのことをお願いしておきたいと思います。

外患・内憂を梃^{てこ}に？

さて、法人化第2期目の最終年度を迎えた本学が直面する困難は、国立大学全体に及ぶ問題と本学に固有のものとは大別できるように思います。前者は、世界の勢力図変化、地球環境問題、我が国が“リードしている”少子高齢化、東日本大震災後の電力供給・産業構造・雇用問題、若年層に懸念される意欲減退など、日本社会の喫緊の課題が源流にあるようです。しかるに、教育振興基本計画には「天然資源の乏しい我が国においては人材こそが社会の活力増進のための最大の資源」と謳いながら、教育とくに高等教育への国の投資には改善の気配が感じられません。そんな状況下で、国立大学に「形成する強み・特色を最大限にいかし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生み出していく」ことが求められる中、本学の進路を定めねばなりません。一方、後者は、当然ながら本学の成り立ちやこれまでたどって



きた道筋に依拠して、良くも悪くも「京大らしさ」が関わる問題なので、それを乗り越えるには相応の意識改革を要するように思います。

ところで、どんな事業でも遂行に

はいわゆる「ヒト」「モノ」「カネ」が必要で、大学の教育研究も例外ではありません。むしろ教育研究には何より「ヒト」が大事ですが、あとの「モノ」と「カネ」、否、「モノ」が含むと解するのも知れませんが、それとは切り分けるのが適切に思える「バ」(場所／環境)を合わせた三つもやはり不可欠です。財務・施設・環境安全保健はこの四つと緊密な関係にあり、とりわけ財務も施設も、大学が行う多彩な活動を支える枢要な裏方であり基盤要素です。では、本学のこれからを考えた場合、その基盤要素の留意点は何でしょうか。

“活動基盤”の留意点

まず財務について。国立大学法人京都大学の収入は国からの運営費交付金が約3分の1、附属病院収入、(受託研究・受託事業・寄附金等の)外部資金、学生納付金の三つで全体のほぼ半分を占め、支出の面では経常費用の4割以上を人件費が占めています。「大学はヒトが大事」なので当然と思うかも知れませんが、人件費が運営費交付金の額を優に上回っていることに注意すべきでしょう。人件費に関してはその上、今年10月から「被用者年金一元化法」の適用を受けて共済年金の財政が厚生年金に一元化され、法定福利費が平成30年度までに激増する見通しです。それに対する国からの措置が望めないとすれば、その増分が本学の財政に及ぼす影響は甚大です。

一方、国立大学法人は来年度からの法人化第3期を控え、直接は文部科学省そして官邸主導諸会議、財務省等から「持続的な“競争力”を持ち、高い付加価値を生み出す」よう抜本的改革を求められています。その文脈から文科省が4月初めに示した「第3期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方について(中間まとめ)」によれば、財政上の厳しさが一層増すことが危惧されます。

そこで今後は、実情を踏まえ交付金の位置付けを見直し、大学として一層の自己収入拡大を図るべきと考えています。受託事業・受託研究等の外部資金獲得、産官学連携も関わる知的財産活用の促進や低金利のため効果が低迷しているとはいえ資金運用にもより努めると共に、「武士の商法」に陥らないよう十分注意しつつ、新たな財源を開拓したいと思えます。ただし、大学が儲けてはならないことに基づく様々な規制があるため、承認が得られそうなアイデアの創出と、その承認を導きうる規制緩和を訴えることが課題になります。そのためには、個々のアイデアについて、関連した専門的知識・経験を有する学内の教職員が協働して取り組む必要があります。

次は施設関連について。本学の主要キャンパスは吉田地区、宇治地区、桂地区の三つですが、国内には北は北海道から南は九州・屋久島まで170余りの地区に様々な教育研究等のための施設があり、その総てについて適切な管理が必要です。しかし、その半分以上が築25年を超えた老朽建物なので、改築や大規模改修も必要なことを考えると、施設の維持管理には多大な費用が必要であり、その財源の捻出にも限界があるのが実状です。

そんな中、決して他の地域を疎かにするつもりはありませんが、やはり学生・教職員等の多くが活動する吉田地区に目を向けると、都市計画法第8条に規定される「高度地区」の適用を受けて高い建物が建てられないため、12年ほど前に桂キャンパスが開設されてから工学研究科の多くが順次移転を進めた今

も、とくに本部と吉田南の構内での慢性的な狭隘状態が続いています。それは構内／間の教育研究の利便性や日常的な交通安全の問題にも大きく影響していて、遅滞のない改善が強く望まれています。

こうした改善にはその時々近視眼的な判断で策を講じるのではなく、何といっても多額の経費を要することですので、スペースや施設の有効活用を大前提にした中長期的展望に基づく計画的施策が求められます。実際、主要なキャンパスについては既に施設整備のマスタープランを策定していて、それに沿った整備に努めています。ただし、大学を取り巻く様々な状況が常に流動的でもあるため、マスタープランにも時宜に応じた修正が必要です。最近の例では「サステイナブル・キャンパス構築」の考えの広がりとその実践が挙げられますが、上述のような問題の深刻化なども修正要因になります。

期待・展望

以上、担当事項に係る懸案と解している問題から二、三について私見を述べさせていただきました。それらを含め、視野に入ることに少しでも本学のために良いと思える方向に進められるよう、努めたいと思っています。ただし、自由と多様性を真骨頂とする本学で、一種の「選択と集中」が求められるような場合、そうした方向を見定めるのは必ずしも容易でないこともあるでしょう。でも、そんなときこそ、本学の皆さんそれぞれの広い識見と寛容な考え方を信じて頼みにしたいと密かに思う次第です。

そして、本学構成員の一人ひとりが全学的視野をもって本学の歴史と伝統に学び、堅持・延展すべき点と改善・変革すべき点とを見極め、相互の意思疎通に努めて知恵を結集し、山極壽一総長の下、教育研究の現場で進められている様々な創意工夫を活かし企画・運営の施策に昇華させて全学的に取り組めば、京都大学の自らの真の発展と広く世界への貢献が導けるに違いありません。

大学の動き

副学長事務代理が発令される

6月1日付けで副学長事務代理が命じられた。これに伴い、理事補の併任は解除された。



徳賀 芳弘（新任）

ペドロ・パソス・コエーリョ ポルトガル首相が本学を訪問

3月26日(木)、ペドロ・パソス・コエーリョ ポルトガル首相をはじめ外務大臣、経済大臣ら一行が



デモンストレーションの説明をする岩田部門長

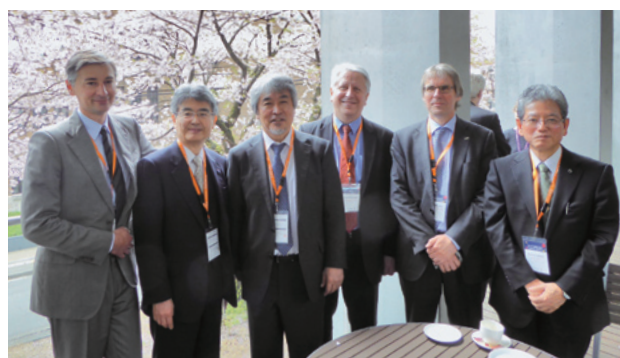
本学を訪問され、稲葉カヨ 国際担当理事・副学長、阿曾沼慎司 産官学連携担当理事、森 純一 国際交流推進機構長らと懇談された。

百周年時計台記念館前で稲葉理事・副学長らの出迎えを受けられた後、迎賓室で歓迎セレモニーを行った。続いて、本学のイノベーション拠点(Center of Innovation: COI)において開発中の、高齢化社会支援ロボット等のデモンストレーションを視察され、岩田博夫COI機構戦略支援統括部門長や担当技術者の説明に聞き入り、日本と同様、ポルトガル社会が直面する高齢化問題に対する対策や支援、そして生活の質(QOL)の向上などの観点から熱心に質問された。

(企画・情報部(国際企画課))

山極壽一 総長が第4回日独6大学学長会議に参加

4月16日(木)・17日(金)、東北大学において第4回日独6大学学長会議が開催され、山極壽一 総長、稲葉カヨ 国際担当理事・副学長、森 純一 国際交



学長集合写真

流推進機構長をはじめ本学教職員が参加した。

今回のテーマは「Building venues for the creation of new knowledge and values」で、本学、東北大学、大阪大学、ハイデルベルク大学、カールスルーエ工科大学、ゲッチンゲン大学の日独計6大学から、約150名の参加者が集まった。

初日の全体会議は、里見 進 東北大学総長による開会の挨拶で開幕し、Ramin Yahyapourゲッチンゲン大学学長代理、シュテファン・グループヘア ドイツ連邦共和国大使館経済部長(公使)、安西祐一郎 日本学術振興会(JSPS)理事長からの挨拶、伊藤貞嘉 東北大学理事による基調講演の後、6大学の学長が各大学の国際戦略等について講演した。

2日目は、学長会議で共同研究の促進および学生交流について議論し、並行して八つの分野の研究セッションが行われた。午後の全体会議では、森機構長とJoachim Gerke ハイデルベルク大学国際部長が本学欧州拠点ハイデルベルクオフィスと本学構内に開所したハイデルベルク大学京都オフィスの紹介

を行い、2大学だけでなく、6大学の欧州拠点、日本拠点としても協力する旨説明した。続いて、各研究セッションの代表者が、現在までの共同研究の成果と今後の計画について報告し、6大学間でのマルチラテラルな研究交流が発展していることを確認した。
(企画・情報部(国際企画課))

マハ・チャクリ・シリントーン タイ王国王女が本学を訪問

4月20日(月)、タイ王国より、マハ・チャクリ・シリントーン王女をはじめとする一行52名が本学を訪問され、山極壽一 総長、稲葉カヨ 国際担当理事・



王女一行との記念撮影

副学長、湊 長博 研究担当理事・副学長、阿曾沼慎司 産官学連携担当理事および北川 進 物質-細胞統合システム拠点長(iCeMS)らが出迎え、iCeMS本館において歓迎のセレモニーを行った。

セレモニーでは稲葉理事・副学長司会のもと、山極総長が歓迎の辞を述べた後、湊理事・副学長が本学の最先端研究の概要およびタイ王国における本学のこれまでの学術研究の関わりについて講演、北川拠点長らiCeMS研究者が最先端の研究を紹介した。

続いて王女一行らはiCeMS研究棟に移動され、研究設備、施設や研究の内容について説明を受け、熱心に耳を傾けておられた。

(企画・情報部(国際企画課))

クロックタワーコンサートを開催

京都大学と京都市立芸術大学が主催して毎年開催しているクロックタワーコンサートを、5月10日(日)に百周年時計台記念館にて開催した。今回は、「レクチャー&コンサート 名曲で綴るオーケストラの歴史」と題し、増井信貴 京都市立芸術大学音楽学部教授によりオーケストラで使用する楽器の特徴や歴史についてのトークの後、同大学アカデミー



増井教授による楽器の紹介

オーケストラ(大学院管弦楽団)によりL.モーツァルトの「おもちゃの交響曲」、G.F.ヘンデルの「水上の音楽」、L.v.ベートーヴェンの交響曲第5番ハ短調「運命」、F.シューベルトの交響曲第7番ロ短調「未完成」が演奏された。「おもちゃの交響曲」の演奏では、おもちゃの楽器を使用して会場の雰囲気盛り上げた他、別の曲では、途中で指揮者が交代して指揮者によってオーケストラの演奏が変化するさまの聞き比べを楽しむ等、趣向を凝らしたコンサートになった。

当日の会場は、ほぼ満員の参加者で熱気に溢れ、参加者からは、「冒頭の楽器の特徴や音の紹介で、楽器への理解が深まり良かった」、「先生と学生さんの二人の指揮者の違いも味わえ、楽しかった」、「緑とレンガの壁が背景になったステージは、クラシックの音楽にとってもマッチしていて気持ちよかった」などの感想が寄せられた。

(総務部(渉外課))

京都大学春秋講義(平成27年度春季講義)を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63年秋から開講している公開講座である。

今回は、メインテーマを「アフリカを考える」として3回の講義を行った。1回目の4月8日(水)は梶 茂樹 アジア・アフリカ地域研究研究科教授による「アフリカ人の名前 ― 無文字社会における命名法を考える」、2回目の4月15日(水)は石井美保 人文科学研究所准教授による「関係性を紡ぐわざ ― アフリカの「妖術」と日本の「因縁」」、3回目の4月22日(水)は山極壽一 総長による「アフリカニストたちの変遷 ― 探検から科学技術外交へ」と題した講義であった。3日間で1,120名の参加があり、講義後には活発な質疑応答が行われた。

参加者からは、「遠いアフリカの地でのフィール



会場の様子

ドワークによる地道な研究の成果を興味深く学べた」、「一見前近代的な妖術が、不合理な現実に向かっているためのものであるというのが、大変興味深かった」、「人とゴリラの対比がとても面白かったので、改めて人間をちゃんと勉強しようと思った」などの感想が寄せられた。

(総務部(渉外課))

京都大学グリークラブが創設50周年記念演奏会および祝賀会を開催

京都大学グリークラブは創設50周年を迎え、4月25日(土)に京都コンサートホールで記念演奏会を開催した。演奏会はOBを中心としたメンバーに現役部員が加わって、オープニングの「京都大学学歌」からアンコールでの「琵琶湖周航の歌」まで、約2時間聴衆を魅了した。

その後の祝賀会では、中村 明 OB会長からグリークラブ創設期の逸話が披露され、井村裕夫 元

総長、長尾 真 元総長、山極壽一 総長、杉万俊夫 学生担当理事・副学長と中村会長により鏡開きが行われた。その後、山極総長や歴代顧問教員などから祝辞が述べられたのち、歴代指揮者の指揮により参加者全員が思い出の歌を合唱した。最後は皆で肩を組みながら「新生の息吹」を歌うなど盛況のうちに終了し、次なる50年への意気込みを新たにした。



演奏会の終演

(教育推進・学生支援部(厚生課))

赤崎 勇 博士に名誉博士の称号を授与

5月15日(金)、百周年時計台記念館迎賓室において、山極壽一 総長、北野正雄 教育担当理事・副学長をはじめとする役員、部局長のほか、佐藤文隆 名誉教授、松波弘之 名誉教授、佐々木昭夫 名誉教授等関係者出席のもと、赤崎 勇 博士(1952年京都大学理学部化学科卒業。名城大学終身教授、名古屋大学特別教授・名誉教授)への京都大学名誉博士称号授与式が挙行された。本学では、青色LEDの研究とその実現に多大な功績のあった同博士に対し、学術文化に寄与した功績が特に顕著であり、本学において顕彰することが適当と認め、名誉博士の称号授与を決定したものである。授与式では、同博士に対し、山極総長から名誉博士記および称号授与の趣意書ならびに名誉博士称号の証となるカラーコードが授与された。

名誉博士は赤崎博士で13人目となる。



名誉博士称号授与式



赤崎 勇 名誉博士

授与式挙行後、記者への会見と「青色発光と私」と題して同博士による記念講演が行われた。「私が京都大学に入学した1949年は湯川秀樹 博士がノーベル賞を受賞した年であり、そのニュースを聞いて、近衛通のプラタナスの道を歩きながら、いつか何か小さいことでもいいから誰もやったことの無いことを自分もやろうと決心し、それが後の青色LEDの研究につながった」など熱い思いを込めて語られ、約450名の参加者は熱心に聴き入った。

赤崎 勇 博士は1929年鹿児島県出身、1952年本学理学部化学科を卒業以来、神戸工業株式会社ならびに株式会社松下電器東京研究所および名古屋大学ならびに名城大学において、種々の半導体の結晶成長と光電子素子開発に関して優れた業績を上げられた。とりわけ、従来、物性制御が困難であると信じられてきた窒化ガリウム (GaN) の研究に取り組み、高品質GaNエピタキシャル結晶成長とp型およびn型の電気伝導度制御を実現し、世界で初めて

GaN pn接合青色/紫外LEDの開発に成功された。また、化合物半導体の結晶成長、基礎物性解明や光電子素子に関連する分野の研究者育成にも大きく貢献された。

同博士の研究は、光の三原色の構成要素として不可欠な青色発光を実現されたものであり、フルカラーディスプレイの根幹をなすものである。また、青色LEDと蛍光体の組み合わせによる白色LEDは、地球環境に優しい明りとして高く評価されている。

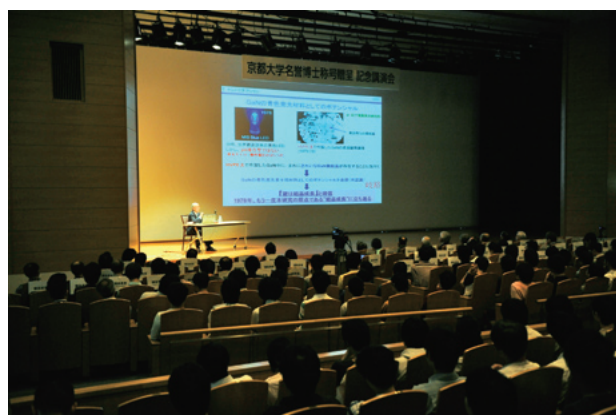
その功績により、2004年に文化功労者として顕彰

されたことに続き、2011年には文化勲章を受章されている。さらに、2014年にはノーベル物理学賞の受賞という栄誉に輝かれた。

同博士は1981年の名古屋大学教授への就任以来、名城大学終身教授の現在に至るまで実に30年以上の長きに亘り、学生、大学院生および若手研究者の指導を行い、多くの研究者を育成し、また、京都大学の教員と共同してワイドギャップ半導体に関する学術分野の発展に尽力し、本学の研究教育にも大きな功績を残されている。



記者会見の様子



講演会の様子

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

部局の動き

東一条館除幕式を挙行

本学から採択された「京都大学大学院思修館」をはじめとする博士課程教育リーディングプログラムの拠点の一つとして、旧京都市左京区役所跡に完成した京都大学東一条館の開館記念除幕式を4月27日(月)に挙行了した。

除幕式では、最初に山極壽一 総長の挨拶があり、松本 紘 前総長(理化学研究所理事長)、塩田浩平 滋賀医科大学長をはじめ本学関係者、地元関係者によるテープカットが行われた後、東一条館および総合生存学館の看板の除幕が行われた。除幕式には、学内外関係者約70名が参加した。続いて内覧会が行われ、和やかな雰囲気の中、参加者は新しい館内を



見学した。

(大学院総合生存学館)

寸言

「好き」に向かって走れ！

今井 雅子

わたしの職業、脚本家は、学歴がさほど意味を持たない。京大卒と言うとネタにはなるが、評価の物差しはあくまで面白いものを書けるかどうかだ。とはいうものの、わたしの場合、「京都大学教育学部卒業」というより「京都大学応援団卒団」と名乗るほうがふさわしい。応援団のチアリーダー部に所属し、ペンよりもポンポンを持っていることのほうが多い四年間だった。



教育学部に入ったのは、両親が教師だったことと、河合隼雄先生の教育心理学が面白そうと思ったからだった。ところが、専攻を決める段になって、教育心理学研究室(当時は「Cコース」と呼ばれていた)は実験が忙しくて応援団との両立は難しいとわかり、教育行政学研究室(Eコース)に入った。一回生のときからEコースでコピー取りのアルバイトをしていたので、研究室の人たちとは仲良くなっていた。

月五万円の仕送りではカツカツで、パン屋の早朝バイトや夜の家庭教師をした。さらに「月刊公募ガイド」という雑誌に載っているコンクールに応募して賞金を稼ぐようになった。

交通事故撲滅キャンペーンに応募した標語「交通事故多発のため涙が不足しております。涙の節約にご協力ください」が最優秀賞を射止め、自分の声で全国放送され、クイズ番組にも出題された。「涙」を空欄にして漢字一文字を当てさせるという問題で、「金」「血」といった珍答が寄せられた。「公募名人」として桂三枝(現在は桂文枝)さんが司会をしていた「ナイトinナイト」にも出演した。近所の商店街では「テレビ出てた子や」とオマケしてくれた。

他にもエッセーやキャッチコピーが入賞し、卒業までに手にした賞金は約二百万円。その実績をお土産に広告代理店のコピーライターに採用された。

両親にならって教師になる道も考えていたから、母校の大阪府立三国丘高校へ教育実習にも行った。受け持ったクラスが文化祭で上演する「オズの魔法

使い」の指導に燃えた結果、舞台は大成功。生徒から大きな花束も贈られたが、「あなたは教師には向いていない。あなたが生徒より楽しんでどうするんですか」という担当教官の冷静なツッコミで目が覚め、教師の道は諦めたのだった。

入学式に着たピンクのワンピースを緑色に染めて、サンタクロースや星や鈴や赤と緑のリボンを飾りつけ、クリスマスツリーに扮して卒業式に臨んだ。「毎日がクリスマスみたいに楽しかった」というメッセージを込めた。

好き放題やらせてもらった四年間だった。わたしが京大で得たものを一言で言うと、この「好きにさせてくれる自由」ではないだろうか。

行き当たりばったりに見えて、常に「好きなもの」を選んでいく。必修単位の講義はよくさぼったのに、語学は必修単位以上に選択した。大学図書館には一人で語学教材を聴けるブースがあり、そこで何時間も英語のテープを聴いた。インドネシア語もテープを借りて覚えた。求めれば何でも与えられる環境の中で、勉強も人生も自分次第で面白くもつまらなくもなることを学んだ。

「好き」はアンテナを広げ、行動力を引き出し、ひらめきを導いてくれる。好きな本、好きな言葉、好きな音楽、好きな場所、好きな景色、好きな人……。 「好き」をいくつ見つけられるか、それに向かってどれだけ力を出せるか。学生時代の蓄えが、これからの人生を豊かに耕す根っこになる。

実際わたしは、この根っこに日々助けられている。登場人物の名前、生い立ち、抱えている悩み、出会いのシーン、行きつけの店、物語の入口と出口……。脚本を作る作業は、無限にある選択肢からひとつを選ぶ、その連続だから。

好きなことを追いかけるパワーは、運も縁も引き寄せる。教師失格と言われたわたしだが、時がめぐり、あちこちの学校で講演したり脚本を教えたりしている。決して褒められる京大生ではなかったわたしが恐れ多くも「京大広報」で寸言を申すことができるのも、「好き」に向かって走ってきた賜物だ。

(いまい まさこ 脚本家、平成5年教育学部卒業)

随想

京都が刻み続ける時間の『ものさし』

名誉教授 西本 清一

奈良で生まれ大阪で育った私が京都大学工学部に入学したのは昭和41(1966)年4月のことでした。平成24(2012)年3月に1年間の延長措置を経て定年退職するまで、始めの四半分は学生として、残りの期間は教員として京都大学で過ごしました。定年退職後は、JR嵯峨野線丹波口駅の西、五条通に面した京都市産業技術研究所(産技研)と(公財)京都高度技術研究所(ASTEM)に勤務しています。これら2つの研究所は、それぞれ固有の機能をもって連携しつつ、主として地域の中小企業向けに、試験分析や研究開発から新事業の展開、さらには経営まで、総合的に支援する役割を担っています。産技研では、京焼・清水焼、西陣織、京友禅、漆工など、京都の代表的な伝統産業分野の技術後継者を育成する研修コースも毎年開設しています。



京都が活動の場になってから既に半世紀余りが経過しました。若い頃の私には、京都という町は何となく馴染めない空間でした。強いて理由を求めるならば、茫洋として捉えどころのないところが魅力の奈良に比べて、京都はどこか人工的で整い過ぎていると感じていたように思います。ところが、年齢を重ねるほどに京都の町が好ましく感じられ、京都の価値を理解できるようになってきました。かつて人工的と映じていたものには、長い京都の歴史の中で、それぞれの時代を生きた人たちの形跡が留められている、そしてその延長線上に自分がある事実に気づかされたのです。

京都の地域コミュニティに密着した公的機関に身を置くようになって以来、多様な祝賀会、季節ごとの諸行事、伝統産業の同業組合が催す定期総会など、地域の人々が集う社交の場に参加する機会が多くなりました。京都はコンパクトな町ですから、しょっちゅう顔を合わせる人たちもいます。そのような場

には、長らく経験してきた大学のコミュニティとは異質の、古くから守り伝えられてきた慣わしが今も脈打って生きる世界が現存しているように感じます。産技研に関係の深い伝統工芸の工房を巡回したおりに、同様の感想を抱きました。どの伝統工芸分野でも、節目ごとに大きな技術の革新があつて今日に至っているに違いありませんが、押し並べて坦々と技術が継承されているように見えます。

大学ではずっと自然科学の分野で活動し、定年退職後の今も地域の科学技術振興に役買っています。17世紀の西欧社会で、近代の端緒を拓く原動力のひとつになった科学革命を経て生まれた自然科学の世界に、文字どおりドブブリ漬かってきました。西欧近代科学の特性は客観的事実の実証性にあります。実験を通じて再現可能な事実を普遍的かつ正当な知識と見なす立場は世界の多くに支持され、今日まで近代科学は飛躍的に発展しました。同時に、科学に原理を求める産業(工業)技術は人間の日常生活に大きな利便性をもたらしましたが、一方で負の側面も顕在化しつつあります。

人類の起源がおおよそ200万年前に遡れるとすれば、科学と科学技術が驚異的に発展した西欧近代の約400年間は、人類の歴史全体のたった0.02%に過ぎません。また、産業革命を経て工業社会に移行してからの約180年間(同じく0.009%)、とりわけ情報革命を経て本格的な情報社会に進んでからの約35年という短期間(0.0017%)に、現代の人間を取り巻く時間はどんどん加速し続けているように感じられます。そのような中で、京都の地域コミュニティでは、自然の循環と密接に関係づけられた歳時記に従い、1,200年の歴史に培われた諸行事が毎年変わることなく営まれ、人間本来の基準となる時間の『ものさし』は今なお日常生活の中で息づいています。

しっかりと根づいた京都のエートスを背景にして、人間の歴史を思う機会に繋がる時間の『ものさし』をひとつの基準と定め、これからも大切にしたいものです。

(にしもと せいいち 平成24年退職、(地独)京都市産業技術研究所理事長、(公財)京都高度技術研究所理事長、元工学研究科教授、専門は物理化学)

洛書

国立公文書館新館建設によせて

奈良岡 聡智

現在日本には、歴史的に重要な公文書を保存する施設として、国立公文書館が存在する。昭和46(1971)年の開設以来、数百万点の公文書を保存・公開し、その機能は次第に拡充しているが、規模・役割ともに諸外国に比べて著しく見

劣りする。そのため、さらなる拡充の必要性が指摘されてきたが、資料収容スペースが限界に達しつつあることから、昨今にわかに新館建設の動きが具体化してきた。

本年3月、内閣府の「国立公文書館の機能・施設の在り方等に関する調査検討会議」は提言を発表し、新館の基本的な方向性を示した。同月には、「世界に誇る国民本位の新たな国立公文書館の建設を実現する議員連盟」(会長・谷垣禎一自民党幹事長)が、首相・衆参両院議長に新館建設を要請した。年来の懸案が実現に向けて動き出したことは歓迎すべきであるが、新館のあり方についての議論は必ずしも深まっていない。以下では、政治史研究者として各国の公文書館を利用してきた経験を踏まえ、留意すべきと思われる点を述べてみたい。

第一に、公文書館は単なる「収蔵」「展示」のスペースではなく、民主主義の根幹を支える制度であるという大原則が、改めて確認される必要がある。55年体制のもとでは、長らく政権交代が存在しなかったため、行政は概ね継続的に行われ、過去の政策の検証はそれほど深刻な問題にならなかった。しかし、小選挙区制が導入された今日では、政権交代が恒常的に起こり得る。政権交代が起こると、新政権は旧政権の政策を把握・検証した上で、政策変更を検討するが、公文書の作成・引継・管理・保存・公開のルールは予め明確に定められている必要がある。公文書が最終的に移管される公文書館は、この作成から公開に至る過程が一定のルールに則って行われることを担保しており、過去の行政を検証するための



重要な役割を担っているのである。

第二に、立法機関(国会)が保有する文書の保存・公開が大きな課題であることを指摘したい。わが国では、行政文書の保存・公開の体制は整っているが、立法機関が保有する文書についてはほとんどルールがなく、歴史的資料のごく一部が衆議院憲政記念館や参議院議会史料室で公開されているに過ぎない。しかし本来は、「国権の最高機関」たる立法機関の文書は、行政機関に先駆けて公開されるのが望ましい。実際、諸外国では立法機関の文書も積極的に公開されており、イギリスのように公文書館と別に議会文書館が開設されている国もある(詳細は奈良岡聡智・上田健介「イギリス議会文書館・図書館の概要」『論究』11号、2014年12月参照)。今般の新館建設に向けた動きの中で、立法機関の保有文書公開が視野に入れていることは高く評価できよう。

第三に、公文書館がうまく機能するためには、立法・行政機関が各種記録をしっかりと作成していることが大前提となることを強調しておきたい。日本では重要な政策決定にかかわる記録を残すことが必ずしも習慣として根付いておらず、閣議の議事録ですら、昨年に安倍内閣が決定するまでは、作成されていなかった。政策決定にかかわる重要文書がそもそも存在しないとすれば、公文書館の役割は、些末な文書を集積するだけということにもなりかねない。既に公文書管理法によって、公文書の作成・保存に関する一定のルールは存在するが、その運用の実態を検証し、不備があれば制度の見直しも視野に入れる必要があるだろう。

第三点目は、文化や習慣の問題がかかわっており、改善には時間がかかるかもしれない。企業の取締役会、大学の教授会など、日本の多くの組織では、重要な方針決定の過程をあまり記録として残さないのが常であり、議事録を読んでも、何が論点かすら分からないケースも多い。公文書館新館建設にあたって問われているのは、日本の様々な組織とも共通する記録作成のあり方であり、さらに言えば、日本人の過去との向き合い方そのものなのである。

(ならおか そうち 法学研究科教授 専門は日本政治外交史)

栄誉

吉田潤一 工学研究科教授、守倉正博 情報学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、吉田潤一 工学研究科教授、守倉正博 情報学研究科教授が4月28日(火)に紫綬褒章を受章された。以下に両教授の略歴、業績等を紹介する。

吉田潤一教授は、昭和50年京都大学工学部を卒業、同52年同大学大学院工学研究科修士課程を修了、同54年同博士課程を退学、同年京都工芸繊維大学工学部工業化学科助手となり、同56年9月に京都大学工学博士の学位を授与された。同60年4月に大阪市立大学理学部附属有機化学研究所助手、平成4年10月同大学院理学研究科助教授を経て、同6年8月より京都大学大学院工学研究科教授として合成・生物化学専攻の有機合成化学分野の研究室の運営にあたり、現在に至っている。

また、この間、近畿化学協会合成部会フロー・マイクロ合成研究会(ロボット合成研究会から名称変更)代表幹事、日本化学会理事、有機合成化学協会副会長などの要職を歴任し、学会の発展に多大な貢献をした。また、平成13年に集積合成国際シンポジウムを創立するとともに、第11回国際有機化学京都会議の組織委員長をはじめ多くの有機化学および関連分野の国際会議の組織委員長も務めた。また、平成21～25年度文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「反応集積化の合成化学」領域代表、平成23年度からは京都大学マイクロ化学生産研究コンソーシアム代表を務め、産学の研究・開発を強力に推進し、この分野での日本の地位と競争力を飛躍的に高めた。

同教授は、有機合成化学のさらなる発展のために



は新しい視点や斬新な手法を導入する必要があるとの観点から、活性種を利用する反応の開発とその集積化の研究を行ってきた。反応集積化とは、複数の化学反応を時間的・空間的に連結し、中間体を単離することなく多段階の分子変換を行うものである。同教授は、「カチオンプール法」など活性種を活用する合成法を開拓するとともに、秒～ミリ秒オーダーのフロー合成化学である「フラッシュケミストリー」を創成し、それらの概念を基盤として「活性種を中間体とする反応集積化」を提唱し、新しい分野を創成・開拓するとともに、その学術的発展および工業的展開に大きく貢献した。

これらの業績に対して、国内においては日本化学会学術賞(平成12年)、名古屋シルバーメダル(平成18年)、グリーン・サステイナブルケミストリー賞(平成22年)、日本化学会賞(平成25年)、国際的にはドイツフンボルト賞(平成19年)、Manuel M. Baizer Award(Electrochemical Society)(平成26年)などが授与されている。

以上のように、同教授は、不安定な活性種を中間体として利用する時間的および空間的反応集積化を推し進めることにより新分野を創成し有機合成化学の新たな展開を先導してきた。その功績は誠に顕著である。このたびの紫綬褒章受章は同人のその功績が高く評価されたものであり、まことに喜ばしいことである。

(大学院工学研究科)

守倉正博教授は、昭和54年京都大学工学部を卒業、同56年同大学院工学研究科修士課程を修了後、平成3年に京都大学博士(工学)の学位を授与された。昭和56年に日本電信電話株式会社情報流通基盤総合研究所に入社



後、同社主席研究員を経て、平成19年10月大学院情報学研究科教授となり、現在に至っている。

同教授は、永年にわたって、無線通信工学の研究、開発、教育に努め、中でも、高速無線LAN(Local Area Network)技術の発展に尽力してきた。無線LANの伝送速度を高速化するには、マルチパス伝搬と呼ばれる現象が課題となる。このマルチパス伝

搬環境下で安定して高速な伝送速度を実現する無線LAN技術が、強く望まれていた。同教授は、この課題を解決するために、マルチパス伝搬環境下に強い伝送方式であり、デジタル放送分野において連続モードで用いられていた直交周波数分割多重方式を、無線LANに必須なパケットモードに適用するという挑戦的な発想によって、非常に優れた世界初のパケットモード直交周波数分割多重方式を実現した。さらに同教授は、技術の研究開発に留まらず、本方式の国際標準規格化を日米のリエゾンパーソンとして主導し、国際標準規格を策定した。現在世界中で普及している無線LAN規格の多くは同規格を拡張した内容であり、これらの規格に基づく無線LAN製品はスマートフォン等にも数多く搭載されている。今日、無線LANは家庭や企業での使用に

留まらず、来る平成32(2020)年に開催される東京オリンピックの社会通信インフラとして重要な期待を担うまでに成長した。同教授が世界の高度情報化社会実現に貢献した功績は非常に大きい。

これらの業績に対して、国内では、文部科学大臣表彰 科学技術賞(研究部門)、社団法人電波産業会電波功績賞 総務大臣表彰など、国際的には、IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers) の標準化組織から功労賞などが授与されている。

以上のように、同教授が、無線通信工学における高速無線LAN技術に関する研究・開発の発展に尽くした功績は、誠に顕著である。このたびの紫綬褒章受章は同人のその功績が高く評価されたものであり、まことに喜ばしいことである。

(大学院情報学研究科)

話題

「竹の環(わ)プロジェクト」を開催

5月9日(土)、桂キャンパスにおいて竹林保全ボランティア活動「竹の環プロジェクト」が開催された。この「竹の環プロジェクト」は、桂キャンパスの竹林保全を通じて環境問題に取り組むボランティア活動で、本学、住友生命保険相互会社、京都モデルフォレスト協会および京都府が主催している。

当日はややぐずついた空模様にもかかわらず、ス

タッフも含めて約150名もの参加者が集まった。

午前中は大変豊作となった筍掘りに汗を流し、午後からは竹の間伐作業と並行して伐り出した竹を使った竹細工に取り組み、竹のけん玉や鉛筆立などを作って、竹という素材との親しみ方を楽しく学んだ。参加者はこの活動を通じて山の生態系や環境に関心を寄せるとともに、竹林保全やボランティアの意義について理解を深めることができた。



竹細工の様子



参加者で記念写真

(大学院工学研究科)

資料

平成27年度 入学試験諸統計

1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学者数 入 学 辞 退 者 数	追 加 合 格 者 数	入学者数
総合人間学部	前期(文系)	65 [△]	231 [△]	230 [△]	226 [△]	67 [△]			124 [△]
	前期(理系)	55	181	181	175	57			
文学部	前期	220	617	616	608	223			223
教育学部	前期(文系)	50	148	148	148	52			62
	前期(理系)	10	47	47	47	10			
法学部	前期	320	746	746	736	331	1		330
経済学部	前期(一般)	180	424	423	420	190			240
	前期(論文)	25	100	88	86	25			
	前期(理系)	25	125	106	106	25			
理学部	前期	311	861	852	850	319	1		318
医学部	前期	250	677	661	650	264	6		258
薬学部	前期	80	201	201	196	84	1		83
工学部	前期	955	2,760	2,759	2,719	947	1		946
農学部	前期	300	923	922	912	313			313
合 計		2,846	8,041	7,980	7,879	2,907	10	0	2,897

[外国学校出身者のための選考の実施結果 (外数)]

学 部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法学部	10人以内	22 [△]	19 [△]	14 [△]	5 [△]	5 [△]
経済学部	10人以内	32	11	10	6	2

2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部			日 程		満 点	総 点		
						最 高 点	最 低 点	平 均 点
総 合 人 間 学 部			前 期	(文 系)	800 点	563.66 点	446.16 点	480.64 点
				(理 系)	800	512.00	402.50	440.78
文 学 部			前 期		750	586.08	482.10	507.65
教 育 学 部			前 期	(文 系)	900	638.11	543.21	574.34
				(理 系)	900	665.10	524.55	564.71
法 学 部			前 期		820	599.92	484.28	515.94
経 済 学 部			前 期	(一 般)	800	586.10	465.85	501.48
				(論 文)	600	410.33	353.50	378.70
				(理 系)	900	682.18	565.23	601.65
理 学 部			前 期		1,200	959.25	709.05	773.85
医学部	医 学 科		前 期		1,300	1,080.20	897.65	958.66
	人間健康科学	看護学専攻			1,200	769.23	616.06	667.99
		検査技術科学専攻			1,200	866.23	733.33	775.94
		理学療法学専攻			1,200	803.70	643.10	700.43
		作業療法学専攻			1,200	762.33	622.13	682.09
薬学部	薬 科 学 科		前 期		950	735.61	554.21	618.48
	薬 学 科				950	739.60	570.75	617.67
工学部	地 球 工 学 科		前 期		1,000	698.18	567.90	593.58
	建 築 学 科				1,000	761.63	580.21	628.46
	物 理 工 学 科				1,000	789.10	599.75	644.10
	電 気 電 子 工 学 科				1,000	739.46	577.56	621.01
	情 報 学 科				1,000	798.21	594.18	649.24
	工 業 化 学 科				1,000	723.06	569.36	607.35
農 学 部			前 期		1,050	826.10	644.71	684.01

(備考) 1. 法学部・経済学部の外外国学校出身者のための選考を除く。
2. 総点については、前期合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県		学						部						計
		総合 人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農		
								医 医学科	医 人間医学科					
北海道		7 2	14 5	1	8 3	9 1	16 8	3	2 1		1	33 5	11 4	105 29
東北	青森		1	1 1	1	3	2					1	1 1	10 2
	岩手	1	1		3 1	1	4		1 1	1	1	1	2 1	13 3
	宮城	3 1	6 2	1 1	8 3	2	9 3		3 2	2	18 9	2 1	54 22	
	秋田		5 4		1		1 1		1 1	1 1	4 1	2	15 8	
	山形	2	1	1		1	2 1			1 1	5 2	2 2	15 6	
	福島	7		3 1	3 1	3 2	9 4			2 2	4 1	1 1	32 12	
	茨城	2 1	8 5	1	2	7 3	15 3	1	4 2	2	21 7	5	68 21	
関東	栃木	3 1	6 2		6 3	6 3	1	2	2 1		12 4	2 1	40 15	
	群馬	4	5	2	3	7 4	5 3	1	2 1		10 2	5	44 10	
	埼玉	7 2	10 3	4	12 3	16 3	13 2		2	2 1	33 2	14 3	113 19	
	千葉	9 1	6 2	2	16 6	18 6	15 5	3 1	4 1	2 2	41 10	18 7	134 41	
	東京	52 17	80 23	15 6	69 27	78 23	95 37	23 4	12 4	10 2	166 46	76 19	676 208	
	神奈川	12 4	25 7	13 2	19 10	23 6	27 10	2 3	5 3	8 3	66 13	21 4	221 62	
	新潟	4 1	11 2	2	4 2	1	8 3	3 1	1 1		15 5	4	53 15	
中部	富山	2	10 5	1	1	5 1	8 5		3		10 1	5 2	45 14	
	石川	2	11 4	2	12 9	5 2	15 8	5	8 5	3 1	27 14	16 7	106 50	
	福井	5 1	4 1	2	8	3 2	8 3	2	2 1	1	21 7	6 2	62 17	
	山梨	1 1	2	2		4	3 2	1 1		1 3	4 3	3 2	21 9	
	長野	6	5 2	1	3 1	4 1	9 2	3 1	6 3	1	21 2	11 2	70 14	
	岐阜	10 5	14 7	3 1	7 3	5	19 8	3	5 1	4 2	47 14	11 3	128 44	
	静岡	13 3	9 4	6 2	15 10	7 5	19 7	5 2	4 1	4 2	49 12	18 6	149 54	
愛知	17 6	35 13	6 1	54 27	37 12	76 28	10 5	10 5	18 6	236 116	59 23	558 242		

都道府県		学						部						計
		総合人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農		
								医学科	医人患婦科 学科					
近畿	三重	31	83	52	158	95	134	73	127		51	5021	147	14162
	滋賀	53	91	55	145	75	105	33	154		53	8132	228	17666
	京都	245	7432	218	6222	6725	7025	5120	3210	217	308103	10437	8294	
	大阪	6727	7227	3112	12053	11052	10743	4315	8938	3516	569192	17866	1421541	
	兵庫	409	3817	2211	6842	5524	6025	6931	3917	126	26497	8531	752310	
	奈良	2210	229	115	6331	4420	3617	3316	186	1511	20682	6126	531233	
	和歌山	22	33	2	61	53	74	62	74	31	411	111	9337	
	中国	鳥取	1	31	22	11		2	11	31		3		165
国	島根	2	32				21	22	22	1	42	3	195	
	岡山	7	145	31	218	133	153	1	63	31	379	198	13941	
	広島	229	205	81	2715	194	3812	54	114	63	8733	263	26989	
	山口	31	41	2	53	21	41	12	21	12	207	7	5215	
	四国	徳島	2	41		42	13	83	42	21	165	81	5015	
国	香川	2	32		81	310	21	43	513	15	31	31	5314	
	愛媛	51	71	25	103	53	102	42	63	42	226	124	8729	
	高知	21	52		52	25	11	11	31	11	32	32	3810	
	九州	福岡	122	2511	41	2413	219	2910	132	52	21	8229	2712	24492
州	佐賀	1	21		32	21	54	21	11		143	42	3414	
	長崎	11	51	11	33	31	53	23	42	21	105	614	4214	
	熊本	73	33	11	64	91	61		11	11	199	65	5927	
	大分		41	13	41	72	11	21	21	11	42	32	3012	
	宮崎	61	11	21	41	21	51	21		53	42	62	3712	
	鹿児島	21	81	14	91	82	72	62	74	41	238	81	8325	
	沖縄	11	21	12	22	93					42	47	257	
	合 計	408123	608222	19462	738330	639236	849316	326111	346146	19983	2737945	915312	79592886	

〔備考〕 外国学校出身者のための選考を除く。

大学入試センター試験及び個別学力検査において受理された出願資格が、ともに高等学校又は中等教育学校卒業（出願時見込みを含む）である者のみ各欄に含む。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者			入 学 者			学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役	浪 人	総 数	現 役	浪 人		総 数	現 役	浪 人	総 数	現 役	浪 人
		27.3卒	26.3以前卒		27.3卒	26.3以前卒			27.3卒	26.3以前卒		27.3卒	26.3以前卒
総合学 部	412	285	127	124	83	41	医 学 部 医 学 科	328	190	138	111	80	31
	男 270	男 168	男 102	男 85	男 52	男 33		男 256	男 148	男 108	男 88	男 60	男 28
	女 142	女 117	女 25	女 39	女 31	女 8		女 72	女 42	女 30	女 23	女 20	女 3
	他 4	他 2	他 2	他 1	他 1	他		他 2	他	他 2	他	他	他
		69.2%	30.8%		66.9%	33.1%		57.9%	42.1%		72.1%	27.9%	
文 学 部	617	421	196	223	141	82	医 学 部 人 健 科 学 科	349	203	146	147	94	53
	男 342	男 217	男 125	男 127	男 76	男 51		男 120	男 49	男 71	男 36	男 17	男 19
	女 275	女 204	女 71	女 96	女 65	女 31		女 229	女 154	女 75	女 111	女 77	女 34
	他 9	他 2	他 7	他 1	他	他 1		他 3	他	他 3	他 1	他	他 1
		68.2%	31.8%		63.2%	36.8%		58.2%	41.8%		63.9%	36.1%	
教 学 部 育 部	195	137	58	62	41	21	薬 学 部	201	135	66	83	55	28
	男 110	男 68	男 42	男 35	男 19	男 16		男 122	男 77	男 45	男 61	男 38	男 23
	女 85	女 69	女 16	女 27	女 22	女 5		女 79	女 58	女 21	女 22	女 17	女 5
	他 1	他	他 1	他	他	他		他 2	他	他 2	他	他	他
		70.3%	29.7%		66.1%	33.9%		67.2%	32.8%		66.3%	33.7%	
法 学 部	746	463	283	330	205	125	工 学 部	2,760	1,728	1,032	946	569	377
	男 535	男 322	男 213	男 240	男 145	男 95		男 2,474	男 1,538	男 936	男 863	男 517	男 346
	女 211	女 141	女 70	女 90	女 60	女 30		女 286	女 190	女 96	女 83	女 52	女 31
	他 8	他	他 8	他	他	他		他 21	他 6	他 15	他 1	他	他 1
		62.1%	37.9%		62.1%	37.9%		62.6%	37.4%		60.1%	39.9%	
経 学 部 济 部	649	416	233	240	156	84	農 学 部	923	586	337	313	163	150
	男 539	男 337	男 202	男 197	男 123	男 74		男 600	男 364	男 236	男 216	男 109	男 107
	女 110	女 79	女 31	女 43	女 33	女 10		女 323	女 222	女 101	女 97	女 54	女 43
	他 8	他 3	他 5	他 2	他 1	他 2		他 8	他 2	他 6	他 1	他	他 1
		64.1%	35.9%		65.0%	35.0%		63.5%	36.5%		52.1%	47.9%	
理 学 部	861	599	262	318	217	101	合 計	8,041	5,163	2,878	2,897	1,804	1,093
	男 732	男 511	男 221	男 285	男 192	男 93		男 6,100	男 3,799	男 2,301	男 2,233	男 1,348	男 885
	女 129	女 88	女 41	女 33	女 25	女 8		女 1,941	女 1,364	女 577	女 664	女 456	女 208
	他 11	他 3	他 8	他 2	他 1	他 1		他 77	他 18	他 59	他 9	他 2	他 7
		69.6%	30.4%		68.2%	31.8%		64.2%	35.8%		62.3%	37.7%	

平成27年度 総長裁量経費による採択事項

平成27年度の総長裁量経費については、下記の32件が採択された。
採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
文学研究科の新・国際学術交流体制とグローバル人材育成のための外国語支援事業	文学研究科	
米国連邦最高裁判所長官等による夏季講義	法学研究科	
化学教育におけるグローバル人材育成と国際化事業	理学研究科	
理学からのオープンサイエンスデータ推進事業	理学研究科	
理学研究科の研究・教育活動の広報活動・科学コミュニケーション人材育成事業	理学研究科	
医学図書館整備による研究支援強化事業(海外医師免許受験支援・オープンアクセスジャーナル投稿支援)	医学研究科	
遺伝医療を実践するためのコミュニケーション教育推進事業	医学研究科	
グローバル人材育成のための大学院学生のキャリアパス形成支援	薬学研究科	
環境工学に関する新興国との国際人材養成基盤整備事業	工学研究科	
大学院教育改革, グローバル人材育成のためのベンチマーク測定	工学研究科	
海外の研究・教育機関との「窓」となる次世代若手研究者の育成	工学研究科	
フィールド・キャンパスを活用したグローバル人材育成事業	アジア・アフリカ地域研究研究科	
「みやこの学術資源」研究拠点形成プロジェクト	人文科学研究所	
日・独および日・英エネルギー理工学双方向パラレルセミナー	エネルギー理工学研究所	
MU レーダー IEEE マイルストーン受賞記念式典	生存圏研究所	
ウイルス研究情報ハブの構築事業	ウイルス研究所	
東京電力福島第一原子力発電所事故由来環境汚染対応のためのモニタリング技術開発及び汚染の追跡・将来予測事業	原子炉実験所	
国際認証を視野に入れた医療者のプロフェッショナリズム教育を牽引していく指導者・ファシリテーターの育成	医学部附属病院	
HeKKSaGOn(ヘキサゴン)コンソーシアム活用の外国語学習・異文化理解促進による国際化推進事業	学術情報メディアセンター	人間・環境学研究科, 情報環境機構
マイクロフィルム電子化による貴重資料のデジタルコンテンツの拡充	学術情報メディアセンター	経済学研究科, 農学研究科, 人文科学研究所, 東南アジア研究所, 大学文書館
グローバル化する本学に対応したオンライン利用者システムの国際化と機能向上事業	低温物質科学研究センター	

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
edX による世界に向けた MOOC 提供のための講義教材開発・実施・ビッグデータ分析の推進	高等教育研究開発推進センター	
専門職社会人を対象としたこころの科学教育セミナー(「こころ塾」)の実施	こころの未来研究センター	教育学研究科, 医学研究科, 人間・環境学研究科, 情報学研究科
環境省ならびに連携動物園・水族館施設との協力による「野生動物保全情報」の社会発信	野生動物研究センター	
TOEIC レベルアップ夏季集中講座ープラス100点を目標にーの開催	国際高等教育院	
入学予定者用 WEB サイトの構築	国際高等教育院	事務本部(企画・情報部, 教育推進・学生支援部)
HeKKSaGOn コンソーシアムを核としたスーパーグローバル人材育成プログラム	物質-細胞統合システム拠点	事務本部(国際交流推進機構)
「京大らしさ」の具現化: 分野を越境するための場づくり	事務本部 (企画・情報部(学際融合教育 研究推進センター))	
男女共同参画推進に関する意識・実態調査経費	事務本部 (総務部(男女共同参画 推進センター))	
高等学校から大学への円滑な学びの移行を促す高大連携事業の拡充	事務本部 (教育推進・学生支援部 (入試改革検討本部))	
「学びコーディネーター事業」の拡充	事務本部 (教育推進・学生支援部 (入試改革検討本部))	
ホームページにおける研究成果国際情報発信強化に関する調査研究事業	事務本部 (企画・情報部)	

(財務部)

訃報

このたび、塚原^{つかはら} 勇^{いさむ}名誉教授、川出^{かわ}由己^{よしみ}名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

塚原 勇 名誉教授



塚原 勇先生は、4月2日逝去された。享年92。

先生は、昭和20年9月京都帝国大学医学部を卒業され、同学部副手、助手、松阪市民病院眼科医長、和歌山赤十字病院眼科医長、京都大学附属医学専門部教授、京都大学医学部講師、助教授、関西医科大学眼科学教授を経て、昭和50年5月京都大学教授に就任、医学部眼科学教室を担当された。同55年4月から59年4月まで医学部附属病院長及び京都大学評議員を務め、同59年12月に退職、名誉教授の称号を授与された。退職後は、昭和60年1月から関西医科大学長（平成14年12月まで）、同63年1月から平成22年5月まで関西医科大学理事長を務め、数多くの医療人の育成に尽力された。

先生は、網膜の疾患に関する研究に造詣を深めて優れた業績を修めた。研究業績は眼科学の広い分野

に及び、特に脈絡膜網膜関門、血液・視神経関門の超微細形態に関する研究は国内外で高い評価を受けた。また血中に投与したフルオレスセインナトリウムの眼内組織への分布の解明について開拓的業績をあげ、蛍光眼底造影法の基礎知識に大きな貢献をし、高く評価された。網膜剥離手術に関しては随一の熟達者として先導的役割を果たし、きわめて高い治療成績をあげた。また、黄斑部疾患における診断、治療の第一人者であり、光凝固による黄斑部疾患治療に関する開拓者でもある。

また先生は、国際眼科学会運営委員長、各種学会、研究会の会長をつとめ学会の育成運営発展に貢献、さらにアジア・太平洋眼科学会の理事としてアジアの発展途上国の眼科学の進歩に尽力された他、文部省大学設置審議会専門委員、第89回日本眼科学会総会長の要職をつとめ、医学教育の発展に協力された。（大学院医学研究科）

川出 由己 名誉教授



川出由己先生は、5月14日逝去された。享年91。

先生は、昭和22年9月東京帝国大学理学部を卒業され、その後同大学院に進学、昭和24年1月東京大学放射線化学研究所で研究に従事、昭和24年12月同研究所助手を経て、昭和31年6月京都大学ウイルス研究所助教授、昭和49年6月同研究所教授に就任された。また、昭和60年5月1日から2年間、ウイルス研究所長として、同研究所の発展、充実に尽力し、大学管理運営に多大の貢献をされてきた。昭和63年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は核酸(RNA)およびウイルスの物理化学、分子生物学的研究の開拓者の一人として超遠心法を日本で初めて導入し、転移RNAの構造と機能関係

の解析、動物細胞のメッセンジャーRNA前駆体分子の発見・同定などの卓越した業績を挙げられている。その後、インターフェロンの研究において、タンパク質の完全精製によってその多様な生理活性を証明し、異なったインターフェロン分子の存在をタンパク質レベルと遺伝子レベルで証明するなどの国際的な業績を挙げられている。

また、日本ウイルス学会、日本生物物理学会、日本インターフェロン学会、国際インターフェロン学会の幹事等の要職を歴任され、昭和63年には国際インターフェロン学会を会長として京都で開催し、成功に導かれた。これら一連の教育研究活動、学会活動により、日本ウイルス学会名誉会員、日本インターフェロン・サイトカイン学会名誉会員、国際インターフェロン学会の名誉会員に選ばれ、平成13年4月29日に勲三等瑞宝章を受章された。

（ウイルス研究所）